



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

(2005年度 スポーツ政策シンポジウム 2005年11月  
24日(木)開催) 「スポーツとメディア 報道とエ  
ンターテインメント性 」

著者	横山 勝彦, 川井 圭司
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	8
号	2
ページ	283-303
発行年	2006-12-22
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011046">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011046</a>

## スポーツとメディア 報道とエンターテインメント性

横山 勝彦・川井 圭司

<横山> それでは、ただ今より、シンポジウム「スポーツとメディア 報道とエンターテインメント性」を開催させていただきます。私は、本日、コーディネーターを務めさせていただきます法学部の横山です。よろしくお祈りします。開会に先立ちまして、総合政策科学研究科長の新川先生からご挨拶がございます。

<新川> 皆さん、こんにちは。よくお出でいただきました。本研究科では、例年、スポーツ政策のシンポジウムをやってまいりました。昨年はラグビー、一昨年は野球、今年はサッカーを中心にシンポジウムを開くことになりました。今日は「スポーツとメディア」ということで、スポーツ文化、我々の社会の中にスポーツそのものがどう根づいていくか、スポーツを通じて、より豊かな社会を実現していくことを考えるための重要なきっかけでありますスポーツとメディアの関係について、特にサッカーにかかわりの深い方々にお出でいただき、いろんな角度からご議論いただける機会を持つことができました。本研究科では、こうしたスポーツにかかわる政策や経営、マネジメントの問題をできるだけ幅広く考えていき、より豊かな社会を建設できる、これからのスポーツのあり方、スポーツを取り巻く社会環境のあり方を考えていきたいと思っております。ぜひ今日のシンポジウムが実りあるものになるよう願っております。

本日のパネリストとして、高本さんはスポーツの経営の立場から、潮さんは報道する側の立場から、また中西さんは選手であり、かつコメンテーターとして活躍しておられる立場で、それぞれお話をいただきたいと思います。本学の川井助教授も含めて幅広くご議論いただき、会場の皆様にとって、より豊かな発想につながってい

く機会になっていけばと念願しております。まずは開会にあたりまして、ご挨拶と御礼とさせていただきます。今日はどうもありがとうございます。

<横山> 「スポーツとメディア」ということですが、今やスポーツが先なのか、メディアが先なのかわかりません。メディアによってスポーツがつけられる。ルールは変えられますし、映像メディアでは時間帯によって試合開始も設定される。言葉としてはみなさんお聞きかと思いますが、スポーツはキラークンテンツなんだ、と。メディアはその有効なソフトとしてスポーツを扱っている。見ている方は面白いのですが、ただ、ドラマ仕立てにしたり、スポーツのエンターテインメント性が、低俗な形での伝わり方をしているのではないかという危惧もあります。スポーツをされる方は多いかと思いますが、一瞬のプレーに自分の考えなり、思いが現れているわけです。スポーツの本質というか、選手が持っているものをそのまま伝えていただければいいのですが、放映権の問題とか経済効率の問題が出てきますので、それだけではファンが出てこない。お祭り騒ぎでいけばファンが来るのではないか、財源になるのではないかと、少し悪循環に陥っているのではないかと思います。こういう問題にそれぞれのご専門のお立場から今日はアプローチしていただいて、スポーツとメディアの悩ましい関係の位置づけをまず確認しまして、今後、望ましい形にどう持っていけばいいか、答えが出ればいいですが、多分、難しいと思います。皆さんからもご意見をいただき、今後、我々が考えていくための一つの方向性を今日は見出せればと考えております。

パネリストの先生方をご紹介致します。政策

学部の川井圭司先生です。川井先生はスポーツ法学がご専門です。労働法を中心に法学部で研究され法学博士号もお持ちです。2年前、プロ野球の問題が取り沙汰されました。プロ選手たちの法的な保護、地位づけはどうなっているかをご研究されています。本日は、ユニバーサル・アクセス権、これは、特別にお金を払わなくても地上波でスポーツを見られる権利です。この問題が日本ではまだあまりなじみがないのは、逆に言えばスポーツ文化がまだ浸透していない証拠だということですが、そのあたりについて各論をお話していただきます。

株式会社徳島ヴォルティス社長の高本浩司さんです。高本さんは本学のサッカー部でご活躍の後、大塚製薬に入社、そのサッカー部でもキャプテンを務められ大活躍された後、37歳の若さで社長に就任されました。Jリーグのクラブの代表としてプロスポーツの球団がメディアにどういった報道を期待しているか。現実とのギャップはどこにあるか。思いの丈をぶつけていただくというお願いをしました。

本日の共催をお願いしました朝日新聞社の東京本社スポーツ部記者の潮智史さんです。潮さんは筑波大学のサッカー部ご出身です。その後、朝日新聞社に入社、社会部、編成委員をお務めした後、現在はスポーツ部記者として活躍され、朝日新聞にウェブというコラムがあります、そこに署名入りの記事も書かれています。『日本代表監督論』を公刊されています。潮さんから、ご自身もスポーツマンとして思いがあるかと思えます。新聞社に所属され、公共性が問われますが、そのあたりの兼ね合いを踏まえて「私が伝えたいスポーツ文化」をお話していただく予定です。

スポーツコメンテーターの中西哲生さんです。テレビ等でご活躍ですが、中西さんも同志社大学サッカー部でご活躍されました。Jリーグの名古屋グランパスエイトで5年間、その後、川崎フロンターレではキャプテンとして、当時、J1昇格にご尽力された選手です。現在は多くのメディアでサッカーを熱く的確に分析され、専門性を伝えようと、今までと違う分析を加えようとアピールされておられます。Jリーガーの経験やスポーツコメンテーターの立場から、スポーツジャーナリズムとは何かについてお話していただきます。

それでは川井先生からお願いいたします。

<川合> 私はスポーツ法学を研究しておりますので、今回、スポーツとメディアについて法的な視点からアプローチしてみたいと思います。そもそもスポーツはアマチュアリズムを前提に発展してきました。その後、アマチュアリズムの見直しが行われ、特に1984年、ロサンゼルスオリンピックで商業化に向けて大きな転換をしました。それが放映権の高騰につながり、独占化、有料化がキーワードになってきます。最終的にはユニバーサル・アクセス権をめぐる議論、お金を払わずにテレビでスポーツを視聴できる権利として認めるべきかどうか、特にヨーロッパを中心に議論されています。そういう点についてお話をさせていただきます。

アマチュアという言葉が発生してきたのはイギリスで、アマチュアには二面性があると言われています。一つは純粋スポーツの追求。金銭をモチベーションにスポーツをやるべきではない。純粋にスポーツに打ち込むべきだという価値観です。同時にブルジョワジーによる労働者階級の排除が、実はアマチュアリズムの中に隠れていることが指摘されています。1879年、ヘンリー・レガッタのスポーツの委員会規定に初めてアマチュア規定が制定されたと言われています。書かれているのは「お金の関係で働いたことがある者についてはアマチュアとして認めない。特に現在及び過去において賃金で雇われた者、職工、職人、労働者である者、またはあった者」。労働者階級を排除しているものに他ならないわけです。

近代オリンピックが始まりました1896年から今のようなアマチュア規定が存在し、体育教師などについては参加が認められない規定がありました。これが現実との乖離が出てきて、ステートアマの存在がクローズアップされ、このままアマチュアリズムをオリンピックで堅持することはできないということで、1974年、改正・廃止していくことになりました。最終的には各国国際スポーツ連盟に決定を委ねていく。IOC国際オリンピック委員会の立場から、アマチュアもプロもこれについてはコメントしない。各国国際連盟において決定してくださいと権限委譲していくことになりました。プロ化に進んでいきましたのがサッカー、アイスホッケー、テニスであります。23歳以下のプロ選手の参加を容認していっ

たのが1985年であります。その後も92年のバルセロナではバスケットボール、ドリームチームと言われるMBLのチームも参加しました。2000年のシドニーオリンピックではプロ野球選手の参加が認められたという経緯があります。

さらに五輪マークについて独占的に使用していく。使用については徹底的に管理して、このマークを使うためにはきっちりしたスポンサーになること。スポンサーの数も相当限定していく。ブランド価値を高めることによって商業化を進めていく方向になります。

これは、日本向けのオリンピックの放映権料の高騰の図表です。1年前のアテネでは170億円という金額が日本から放映権料として支払われています。1984年のロサンゼルスオリンピックがプロ化に進み出したターニングポイントと言われますが、現在ではロンドンの五輪についても開催土地の候補が9カ国にわたったわけですが、この当時はロサンゼルス以外の都市は手を上げない。オリンピックを引き受けると赤字になるということが前提でした。それを引き受けたロサンゼルスはこれを大黒字に転換していくことになります。実際、ロサンゼルスを契機に鰻登りに放映権料が上がっていく経緯がありました。

メディアの商業化が進むことによって、スポーツ自体に若干の変更が見られました。ソウルオリンピックの時には陸上男子100メートル決勝で、カール・ルイスとベン・ジョンソンが出場しました。視聴率で一番稼げるのはアメリカです。アメリカのメディアで流す場合はプライムタイム、ゴールデンタイムに設定したい。現地では早朝です。アメリカからの放映権料を重視して最終的に早朝から準備して選手を走らせることも実際に行われたということもあります。

サッカーの世界カップの放映権料の高騰。延べ視聴者数。放映権料は日韓の世界カップでは1,232億円。総額ですが、相当の金額に上っています。次のドイツの大会で数値はわかっていますが、2010年の南アフリカでの大会では1,340億円という朝日新聞の報道がありました。どの種目が人気があるか。ダントツはサッカー。世界カップで延べ視聴者数が334億人。世界人口が60億人とするので相当数が視聴していると言えます。

日本でスポーツがどれほど視聴率を獲得してきたか。トップ5。第5位、すべての番組の視聴

率からですが、世界バンタム級タイトルマッチ。ファイティング原田対エデル・ジョフレ。第4位がプロレス。WWA世界選手権、デストロイヤー対力動山。第3位。2002年ワールドカップのトーナメントで日本対ロシア。ここまでスポーツが占めています。第2位、東京オリンピックです。女子バレーの日本対ソ連他。第1位もスポーツで占めますとすべてスポーツですが、残念ながら1位はNHK紅白歌合戦。それでもスポーツが相当の視聴率を獲得していることが言えるわけです。

1位から10位まで。トップ10。紅白歌合戦は視聴率が81.4%。現在では考えられない数字です。高い視聴率を稼ぎだしていたのが1960年代の始めです。まだエンターテインメントも発展していなかった。チャンネルも今ほど多くなかったことによって高い視聴率が獲得し易かったと言えるかもしれません。それに対して注目すべきは2002年のワールドカップであります。66.1%。現在においても相当高い、他ではなかなかこの視聴率は稼ぎだせないのではないかと思います。ファイティング原田さんもすごいですね、5位と8位に二つあります。1位から10位までの間に何と7つがスポーツで占められている。日本だけではなくアメリカでもベスト5まででは、NFLのスーパーボウルが占めます。

ここまでスポーツの商業化が進んでいくと、どういう影響を及ぼしていくか。カラー柔道着の導入、バレーボールのラリーポイント制、陸上100メートルの決勝の話とか。この場で議論されていくはずのスポーツ報道のエンターテインメント化、バラエティ化の影響と言えるかだと思います。

特にキーワードはメディア王と言われるルパール・マードック、オーストラリア人の話です。イギリスのメディア界にも進出しています、アメリカでも5大ネットワークと言われるものの一つ、フォックスを彼が牛耳っている。イギリスでもサッカー界についてはマードックが一手に引き受けていることもあります。タイムズ、サンとか有名な活字体のメディアについても支配している。特にイギリススポーツ界への進出についてお話をしたいと思います。BスカイBというBritishのB、日本の場合はJになります。アメリカはA・SKY・Aになります。マードックによるプロスポーツ放映の独占化、有料化が進んで

いったのが1990年代から、それからどんどんとヨーロッパで問題になっていきます。メリットについて。一つはBスカイBは地上波での放映よりも圧倒的に多くのスポーツ番組を提供することができる。1日中、スポーツ番組を提供することになりますので、年間8,700くらいの時間帯の放送が可能になる。かたやBBCでは頑張っても約1,400時間ほどです。スポーツファンにとっては選択肢の増大につながっていく。一方でスポーツ団体にとっては大きな収入が獲得できる。スポーツのスタジアムの整備、海外からのスター選手の獲得、草の根レベルの人材育成にお金を回すことができる。そういう意味ではスポーツの発展に寄与する面も十分にあると言えるわけです。

しかしその一方で、どんどん進行していくとBスカイBが大きな力を持ち過ぎ、すべてのスポーツが有料化になっていく。地上波での視聴ができなくなるのではないかという危惧が実際にイギリスでは起こってきたわけです。イギリス議会では真剣に議論が進められていきます。今までスポーツを通じて青少年がスポーツに携わり、人格の形成をし、仲間をつくってきた。この文化が失われてしまうのではないかと。一定のお金持ちだけのアクセスに止まり、ユニバーサルというすべての人たちが簡単にスポーツメディアに接することができなくなってしまうのではないかと。イギリス議会で議論されたものですが、ハウエル卿というスポーツについて意見を出してきた方の演説の一部です。「青少年は地上波テレビですばらしいスポーツを見て、自分もやってみようとするのである。放映権の自由を主張する人たちは青少年をスポーツに導き、奮起させる義務があることを忘れてしまっている」と。儲けのことだけを考えている。それは許されないという論調です。

実際にオリンピックの場合は、公金、税金が投入されている部分がある。我々が支払ったお金で選手を育てている環境があるのであれば、選手たちの活躍を見る権利があるという主張もなされています。最終的にイギリスではユニバーサル・アクセスを認めるべきだという議論が勝って、指定行事としてAグループ、Bグループに分かれるわけですが、一定のスポーツについてAグループについては独占の放映権料の獲得は認めない。無料で視聴を保障するスポーツ

が上がっています。言うまでもなくオリンピック、サッカー、ウィンブルドンのテニスの本戦、ラグビー、競馬がイギリスで認められている特定指定行事のグループAです。国家において大事にすべきだという位置づけです。Bはクリケットを始めいくつか上がっていますが、これらについては、独占の放映権料の獲得は認めるが、二次的放映権、録画放映については必ず他のメディアに与えていく必要がある。ライブでは独占してもいいが、二次的な放映について他局にも放映を認めていく。ダブル・スタンダードを置きまして、AグループとBグループに分かれているわけです。

1950年代からイギリスでは特定指定行事という言葉をつくってしましてリストアップしています。メディアとの関係でクローズアップされてきて、ユニバーサル・アクセスという言葉で議論され出したのは1990年代になってからですが、50年代からどういうスポーツについて特定行事にするか、スポーツ以外についても何をもって特定指定行事というのかについて議論されてきています。1950年代からクリケットは入っていたのですが、今回の1996年以降の指定行事については、自ら辞退したい、BスカイBで放映してほしい、その方がお金が潤うからと主張して、最終的にはBスカイBの放映の中に入り込むことによって資金を潤沢に抱え、一方ではクリケットの振興を考えていこうと、政策的に望んだということがあります。

アマチュアリズムを前提にスポーツが発展してきた。それがアマチュアリズムの見直しがあり、1984年のロス五輪がターニングポイントになったこと。商業化が加速していき、カラー柔道着の話、ラリーポイント制、陸上競技の時間帯の問題が出てきたこと。放映権料がどんどんと高騰していった。独占化、有料化の動きが見られる。その中でスポーツ団体は自主的な財源を確保していった。一方ではメディアの側からは競争がどんどん激化していったことが指摘できます。

今回のシンポジウムでは重要なキーワードとなるスポーツ報道のエンターテインメント化も、民間のメディア放送会社であれば、視聴率を稼ぎだすことが至上命令ですから、いかにして視聴率を稼ぎだすかといったスポーツのエンターテインメント化の動きも見られるところです。

これに対して公共の放送であれば、そういう心配はないという位置づけになるかと思えます。その流れの中でユニバーサル・アクセス権をめぐる動きが、特にヨーロッパで議論されてきた経緯があります。メディア側には営業活動の自由がある。これは基本的な人権の一つであります。自由に営業してもよろしい。ただしこの自由は公共の利益に反してはいけません。日本国憲法の公共の福祉に反してはならないということですが、このバランスをいかにとるかが重要な議論になっていくと言えそうです。

メディア・リテラシーが今後は必要になってくる。現在も注目されていますが、そういう視点からスポーツの公益性の認識をもう一度考え直すべき時に来ているのではないか。こういうものの適切なバランスを考える中で、スポーツとメディアの良好な関係を生み出していく必要があるということが、私からの提言です。

<横山>ありがとうございました。視聴率第1位は紅白歌合戦ということで、音楽とスポーツは身近な生活文化だということが納得できました。それだけにご指摘のように、公共性や利潤が絡んでくるとお聞きしました。続きまして徳島ヴォルティスの高本さんから「球団がメディアに期待する報道」でご講演をいただきます。

<高本>Jリーグというプロのサッカーリーグがあります。J1が18チーム、J2が12チームです。徳島ヴォルティスは今年初めてJ2に四国の徳島から参入しました。1年目でスタートしたばかりですが、徳島は今、人口が81万人です。10年後には徳島県全体で60万人台に減るだろうと予想されています。そういう小さい県、小さいエリアで、どういふうにスポーツクラブがメディアに、報道に期待するかということでお話させていただきます。

そもそもスポーツクラブにとって、球団にとって、メディアとは何か。大きく分けて二つあると思います。一つはチームや選手、またはスポンサー企業の商品であったり、企業名をPRする場である。試合をやる、メディアが取り上げてくれなかったらチームや選手の知名度は上がらない。それに伴ってそこに協賛してくれているスポンサーメリットがなくなる。スポンサーがバックアップしてくれない。球場ではどうか。スタジアムでは一般視聴者に情報が行かないことによってスタジアムは一杯にならない。そうな

ると選手のモチベーションが上がらない。パフォーマンスのいい試合はできない。このようにメディアがないと悪循環が生まれてしまう。

もう一つは収入源の一つである。これが経営者としてはありがたい部分でありまして、大きな収入は入場料収入、スポンサー収入、放映権収入、マーチャンダイジング・グッズの収入になっています。この4つが収入に上げられます。J1では、Jリーグは分配金で各チームに同じ金額を分配してありまして、J1で約1億円以上の分配金が支払われています。Jリーグ全体で放映権料で45%を占めています。現状の日本のスポーツクラブの経営においてはメディア放映は大切なものであることを頭に入れておいていただきたいと思えます。

そもそもJリーグにいるクラブチームのコンセプトは何か。Jリーグの理念は3つあります。「日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進」、スポーツ文化をキーワードに置き「豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発展への寄与」、「国際社会における交流及び親善への貢献」。この3つを理念として上げております。この理念のもとに各クラブの運営方針がありまして、「県民・企業・行政の三位一体による運営である」と。今までの日本のスポーツはどこがスポーツをつくってきたか。1993年から2003年の10年間で、スポーツ団体、今までの日本のスポーツは企業スポーツ、企業がバックアップしてスポーツを成り立たせていました。実業団のスポーツが10年間に277、もしかすると300いっているかもしれませんが、休廃部に追い込まれています。今まで企業はチームを持つことによって福利厚生的な面があった。税金対策ができた。または企業の社員のモチベーションを上げることができた。それと宣伝効果があった。そういったことで、スポーツ球団、スポーツチームをつくってきました。それがバブル崩壊と同じように難しくなってきたのが現状だと思います。そういう中で今後の日本のスポーツ、スポーツの文化をどうやって築いていくかが、今回のJリーグのスタートにあたって重要な課題となりました。その中で、今からは企業だけに頼るのではなく、県民・企業・行政の三位一体になって、地域のイメージアップだったり、社会的、経済的波及効果を得られるような地域に根ざしたスポーツクラブを目指していく。徳島ヴォル

ティスもこういう営業方針の中でスタートしております。

そのコンセプトに基づいて、メディアに期待する報道とは何か。スポーツ、サッカー教室を通じて子どもたちに生活に役に立つものを身につけさせるということを我々はやっています。その活動をぜひメディアに報道してもらえないか。活動内容を報道していただきたい。ヴォルテスでやっている選手をメインに置くんですが、1年目ということで、ゲームでどんなに疲れていても選手をサッカー教室等に参加させています。2月から7月までの半年の集計で43回で4000名、徳島には0歳～12歳の子どもたちが約9万人います。スポーツをする対象が6歳～12歳とすると5万人います。その中の1万人を徳島ヴォルテスとしては何らかの形で子どもたちとコミュニケーションをとってスポーツの楽しさ、子どもたちのコミュニケーション能力を養っていきなさいと思っております。人数の少ない中で、これを目標としてやっていきたい。それを報道していただきたいと思っております。

各世代間のコミュニケーションの活性化が図れるような報道をしてほしい。昨年、朝日新聞で集計がありました。今、中学生が1日平均、大人としゃべるのは何人か。1.7人だそうです。一人が先生、もう一人が親。この二つがほとんどで近所の人とかなないそうです。親がしゃべる内容として、一番多かったのが「早く何々しなさい」、「早くご飯を食べなさい」、「早く学校に行きなさい」、「早く勉強しなさい」、「早く寝なさい」。これがほとんどだった。と。かたや大人が近所に住む幼稚園の子どもの名前を5人以上知らない。特に男性はほとんどだった。昔はよく、近所の子どもとおじいちゃんのコミュニケーションがあったんですが、今は世代間を越えたコミュニケーションがなくなってきている。それをスポーツを通じて、サッカー教室を通じて増やしていきたい。そういうことを図れるような報道がほしいと思っております。

地元企業とタイアップして新しい商品を生み出していく。開拓できるような活動をしていきたい。ローソンの「から揚げ君」とタイアップして通常2週間で売る2倍を売り上げたという経済的な効果もあった。徳島のイル・ローザというケーキ屋さんでタイアップしてヴォルテス・ロールのケーキをつくりました。徳島にはスダ

チとかありますが、鳴門金時というお芋もあります。それをペースト状にして徳島名産として売り出していきたい。これを今、徳島の知事が県外に行く時にお土産で持って行ってもらう。徳島の名産をつくってあげたら、と。商機をつくっていきたい。

国際交流。J2で年間44試合あります。徳島で22試合行い、あとの22試合は北海道から九州まで行って試合をします。そこでサポーターの行き来がありまして、そこで交流が生まれる。徳島にコンサドーレ札幌との試合がありまして、札幌からチャーター便を札幌のサポーターが用意して300名の方が徳島に来てくれました。札幌から徳島に300名の方がたった2時間のために来てくれたことはない。2時間の試合を見るために来る。国内の交流的な部分が生まれてきている。そういったことも報道面から考えていただきたいなと思っております。

社会貢献的な活動内容の報道をもっともっとしてほしい。それと地域活性化の経済効果の報道、これをメディアの方に期待するということでございます。Jリーグがスタートして13年になります。他のチームでは社会的効果が生まれたと言われております。地域の活性化ができた。地域のアイデンティティの育成に貢献した、と。または自発的なボランティア活動が増えてきた。各チーム、各球団の運営を各地域のボランティアの方に呼びかけてボランティアで賄っているチームがほとんどです。徳島ヴォルテスもボランティアで、毎試合80人くらいの方が来てくれます。団体をつくることで、今度、どこかの空き缶拾いに行くとか、団体の組織が自ら動いて、選手も参加してボランティア活動がどんどん増えてきた。若者が地域のことを考えるきっかけとなった。地方ですと東京、大阪に若者たちは行きます。大人の方でも転勤等で東京に行きます。新聞、メディア等で徳島の地元の名前が出てくることによって、郷土愛が強くなってきた。地域のことを考えるきっかけになってきている。暴走族を減少させたというチームがあります。鹿島アントラーズです。昔、鹿島のあたりでは暴走族が多かった。若い子どもたちが今まで発散する場所がなかった。それが球場でスポーツを見て応援することによってエネルギーを発散して暴走族が減少したという地域です。家族の中で、世代を越えて共通の話題が増え、交流が増えた。親、

子、孫と3世代でスポーツをキーワードにして会話や交流をしてほしい。世代を越えて会話するキーワードは何か。世代を越えた会話にはスポーツが効果があります。他県からの来客により地域間の交流が生まれてきた。甲府、札幌が県とタイアップして徳島の物産をPRしています。他県からの来客からそういう交流が生まれてきたということです。スポーツ文化が定着し、地域のスポーツ活動が盛んになってきた。サッカーだけではなく。サッカー以外でもトライアスロンとかソフトボール、プロのチームを各地で持っています。新潟アルビレックスという、プロのバスケットチームがあります。他のスポーツもどんどん活性化してきているという社会的効果があります。地元が全国的に知名度が上がったという社会的効果が生まれているという先進地の事例でございます。

経済的効果。県内の観光スポットの増加。試合を見るだけでなく、せっかく行ったんだったらその地域の観光地を前もって調べて見に行こう、と。チームのロゴ等を活用した商品がどんどん生まれてきた。それによって関連のグッズ等も消費拡大していった。チーム、クラブから波及する2次的効果、3次的効果がある。直接的効果は人が来る。飛行機、バス、駐車場、飲食等が直接的効果だと思います。一次的波及効果が、それに対しての原材料が、増えてくる。2次、3次と行くにつれて雇用が生まれてくる。雇用が生まれてきているところも実際にあります。徳島ヴォルティスの1年の経済波及効果を見ますと15億円と出ておりました。

スポーツクラブがメディアに期待する報道とは。なぜスポーツを推進するか。Jリーグの理念のもとで推進する。推進することによって国民・県民・地域の人に感動を与え、もっともっと地域を元気にしたい、と。現状のメディアには大切な部分もありますが、エンターテインメント性、試合の結果、試合そのもの、選手の情報、エンターテインメントな情報を流すだけではなく、社会的効果、経済的効果の部分は今後、特に徳島のような小さい県で、メディアに期待したいなというふうに思います。

<横山>ありがとうございました。思いの丈をぶつけられるかと思いましたが、テーマに真面目に取り組んでいただき、ありがとうございました。スポーツが持つ社会的効果、世代間交流の

促進作用は今後のスポーツ振興にとって重要な要素です。その部分をエンターテインメント性に加味して伝えるべきだというご提言でございました。

それでは次に潮さんから「私が伝えたいスポーツ文化」でご講演をお願いします。

<潮>大変耳の痛い話の後ですが、私の場合、現場にずっと記者としております。18年目の記者生活です。途中で社会部に行ってオウム真理教の事件取材したり、今年4月まではロンドン駐在をしていました。スポーツ担当の記者として行っていましたので、その経験も含めて、私が見聞きしている話を中心にしたいと思います。

お二人のお話を聞いていても、メディアの括りで強いのはテレビで、プラス最近はインターネットという新しいメディアが出てきています。新聞社はその中で先行きははっきりしない状況に置かれています。生き残っていくために、どうい記事を書いていけばいいのか、我々現場の人間からすると、どういう取材をすればいいのか、日々考えながら模索しているところです。ただそうは言っても朝日新聞の中でもリストラがどんどん進んでいる状況があります。お金のかけ方、使い方も大分変わってきました。編集局という紙面をつくる、記事を書く現場で言いますと、スポーツの分野は唯一記者が増え、陣容が増え、拡大している部署でもあります。スポーツというものが読者の方から求められている現れだと思います。

私はサッカーの現場に長く携わって来ています。一般紙という立場もありますが、Jリーグが93年に出て、そこからブームが起こります。サッカーを見始めた方にも分かるようにと書くわけです。中西さんほどでなくても、私も大学でサッカーをやっていました。3年生の時には同志社に負けたことがあります。サッカーをある程度やっていた人間として、サッカーに詳しい人にもまた「なるほど」と思わせる記事を書きたいと日々格闘しています。朝日新聞はJリーグ、ヨーロッパのサッカーにどうしてもいきがちです。ヴォルティスの地域活動についてはなかなかいかない。地方支局で取材に行ったりするケースはありますが、スポーツ面ではなかなか取り上げにくくなっています。紙面も字を大きくしたり改革して、相対的に紙面は狭くなるわけで、一部のスポーツを切り捨てていく傾向



にどうしてもなっています。現場の我々としては悩ましいところではありません。

スポーツ文化を、私個人としてはスポーツそのものの面白さ、醍醐味を伝えることと解釈しています。特に私が担当するサッカーは世界的なスポーツです。国民性、地域性、その国の文化、宗教に反映されやすいスポーツです。具体的な話をしますと、今、日本代表にはジーコというブラジル人の監督がいます。2002年のワールドカップの後に就任して来年のワールドカップの出場権を堅持しましたが、メディアの間でも評価は常に分かれています。前任者はトルシエという監督で、彼はエキセントリックな人で「こういうサッカーをしなさい」と厳しく選手に植えつけていきました。その人が去った後、ジーコが来て、今度は「自分たちの発想を生かしなさい」と放任したわけです。選手たちはどういう反応をしたか。選手たちは困りました。今までは「こういうボールの時はお前はこう動け」と細かくやってきた。その時々取材では分かりにくいですが、時間がたつといろんな話が伝わってきます。最初の頃、ジーコはどういうサッカーをしたいと思っているのか、選手たちはなかなか聞きにいけない。「こういう場面でどうしたらいいか」と選手の中で少しずつ話が始まっていきました。よくない試合があったり、いい試合があったり、チームとしてうまくまとまっていかない。今は宮本君というガンバ大阪の選手ですが、彼がキャプテンを任されていく中で、少しずつジーコのところに聞きにいった。宮本君という人が間に入って、ジーコがやりたいこと、選手がこんなチームにしたい、こんな練習がしたいということが、少しずつ伝わっていきます。

ジーコが鹿島アントラーズに来たばかりの時、こんな話をしていました。ジーコは当時、コーチ兼選手でしたが、ボールをサイドに出して、そこからセンタリング、クロスを入れてシュートの練習をする。ジーコはサイドを主に担当する選手を置き、シュートを打つ選手を二人置いて、二人が入って行ってシュート練習をする。あるサイドの選手がジーコに聞いた、「それで僕はどちらの選手にボールを合わせればいいんですか？」、ジーコは「愕然とした」と。試合のための練習であることを考えれば、「練習の中でそれを判断するのが君の仕事だよ」という話をしたそうです。代表チームでは、ジーコは「誰が来て

も話をする」と。そこに行き着くまでに、選手がジーコに問いかける、何かを主張する時間がすごくかかった、と。それを経て、今、いいチームになってきていると思います。

スポーツ文化という言葉で言うと、日本人はトップアスリートですら、そういうやりとりをするのに時間がかかる。それは何なんだろうか。単純に悪いことと言っていいのか、「もっとコミュニケーションをとればいいじゃないか」と我々は書きがちなんですが、それができないのはなぜなのか。そういうことを書ければな、伝えられればなと思います。そういう記事を書くのは取材に時間がかかりすぎ、書き方も難しい。的確に事実として正しいのかどうかの検証も時間がかかるんですが、それを書き明かしていけば、日本のサッカー、スポーツは文化なのか、教育なのか、そこが見えてくるのではないかと考えています。

イギリスのスカイ放送の話がありました。4月まで1年半ほどロンドン駐在に行っていた時の話ですが、プレミアリーグ、日本でいうJ1ですが、その試合を見ていて、明らかに審判のミスジャッジがあった。テレビは何度もその場面をコマ送りにし、再生して正しいジャッジだったかどうかを検証する。その時に感心したことがありました。解説者がコメンテーターとして話をしている。中継をやっている最中に、ファウルがあったかなかったか。ゴール前で、ファウルだとするとペナルティキックを与えて攻めている側にチャンスです。ファウルじゃなくて自分からわざと倒れたと判定すれば、シミュレーションといって攻めている側の倒れた側がイエローカードをもらうシーンだった。この時の審判は「シミュレーションをとって、倒れた人の反則だ」としました。解説者の中の意見が分かれるわけです。「今のはシミュレーションじゃない、明らかにPKだ」と、その場で喧々諤々とやるわけです。時間がたってスローモーションで振り返る。カメラの台数がJリーグの中継よりずっと多くて、あらゆる角度から撮っていますから、全部見ると、ほぼ一目瞭然で分かる。実はPKに値するファウルだった。審判の判定が間違っていた。途端に、そこで解説者は「今のは明らかに間違っていました」と互いに言い合う。「あれは私が間違っていた」と。それは生中継の試合でしたが、試合が終わった後、日本では審判の取材は難し

い。試合の後、コメントしてはいけないというルールがあります。スカイに関しては審判を引っ張りだして生放送の枠の中でインタビューする。これは契約の中に入っていたりしますが、日本では考えられない契約です。そこでレフェリーが「あれは私のミスジャッジでした。あのシーンでは他の選手と重なって見えなかった。その周りの選手の反応、リアクションを見て、アシスタントレフリーの話聞いて、ああいう判定をした。ただあれは間違っていた」ときちんと説明するんです。当然、翌日の新聞はそのシーンで大々的にやるんです。騒ぐんだけど、その審判をやり込めたり、現場に復帰できないような状態にはならない。ある程度、審判がミスするのもサッカーの一部だろうという見切りがあるんだろうと思います。これは審判をインタビューするメディアとかに、日本では考えられないことですが、解説者が「間違っていた」、審判が「ミスジャッジをした」ときちんと話をする。それも自己主張なのかもしれませんが、新鮮なものでした。

先日、ワールドカップのアジア予選のプレーオフで、ウズベキスタンとバーレーンが試合をしました。日本の審判団がジャッジしていましたが、主審がルールの適応を間違えて国際サッカー連盟が最終的に再試合の決定をしました。サッカーのルールで言うと、審判の決定、決断は最終のものだということを覆していることになるんです。その後の影響ですが、Jリーグの試合ではないところで起きたことでしたが、日本の審判がミスジャッジしたということで、Jリーグ、Jリーグの選手の中で不信感というか、「日本の審判はレベルが低いのではないか」という空気があったように思います。

私自身の記者生活の中で印象に残っているエピソードをお話したいと思います。93年10月、ワールドカップのアメリカ大会の最終予選がカタールのドーハでありました。私も取材に行っていました。現地に。日本は最終戦でイラクと試合をし、これに勝てばワールドカップに出場できる。ご存じの通り、終了間際に1点取られて追いつかれて、当時、「ドーハの悲劇」と取り上げられました。私は「ドーハの悲劇」と表現したことは一度もないんです、悲劇だと思ってないものですから。この時、試合から2時間後くらいに表彰式がありました。その後の表彰式に日本の

選手も呼ばれていました。6チーム参加して、ベスト11の中に日本の選手が4人入っていました。カズ、ラモス、ゴールキーパーの松永、柱谷。私は表彰式があったホテルに泊まっていたので、私もある意味でうちひしがれて待っていたんです。そこに今のサッカー協会会長の川淵さんと副会長の小倉さんが二人でいらっしゃいました。メディアの我々に頭を下げて、「申し訳ないが、選手は来られない。察してほしい」と説明がありました。表彰式は出場を決めた国、サウジアラビアと韓国の選手も来ています。負けた4カ国の選手も来てました。負けたイランの選手は二人、ベスト11に入っていました。このうちの一人は足を怪我して松葉杖をついて来ました。イランの記者がしきりに日本の記者に「何で日本の選手は来ないんだ。カズはすばらしかったじゃないか。ラモスはすごかったじゃないか」と言いました。大会を総括していたアジアサッカー連盟の技術委員たちの現場のレポートによると、「日本のやっていたサッカーがワールドカップに出た時に最も通用するだろう。すばらしいサッカーをしていた」と評価されたわけです。表彰式が終わり、部屋に戻って記事を書くんですが、試合の記事とは別に、「選手たちが表彰式に出てほしかった」ということを書きたくてコラムに書きました。負けたって、そういう評価を受けているし、十分闘ったのだから出てくればいいじゃないか、と。日本に帰って来て、びっくりしたのが、その記事に対する投書が20何通来ていました。ほとんどの人が若い人たちで、「傷ついて帰ってきた選手をさらに傷つけるようなものを書くな」というリアクションでした。その時の投書を今でも持っていますが、ある意味で、そこが日本のスポーツ、日本のスポーツ文化を考える時、自分の中で原点というか、出発点になっています。それはまた後でクロストークで話す機会があれば話しますが、それぞれ皆さん、どんなふうに感じられたでしょうか。

メディアの話、公共性の話は後ほど質問があれば話したいと思います。

<横山>ありがとうございます。こういうテーマになると、メディアの代表ということから、我々の標的になるということで、後のクロストークでも、そういうお立場でよろしく願います。潮さんからは、説明責任、文化性についての示唆に富むお話だったと思います。

それでは中西さん、よろしくお願いいたします。

<中西>前の3人の方が真面目な話だったので、やわらかい話をしたいなと思います。ここに呼ばれたのも同志社大学のOBだということが大きいと思います。スポーツジャーナリズムというほどのものを僕はまだ持っていると思いませんし、この仕事を始めて5年ですが、自分自身のスポーツジャーナリズムは完成されたものだと全く思っていないので、その部分をお話しても楽しくないし、聞いて疲れてしまうので、僕自身が、なぜこういう仕事をしていて、どういう形でこの仕事を始めて、こういう状態になっているかをお話したいと思います。そこにメディアとスポーツがどう共存したらいいかが含まれていると思います。

僕自身、なぜこういう職業を選んだか。同志社大学を卒業してグランパスエイトに入団した。僕の現役時代を知っている人は少ないと思いますが、一流選手というわけではなくて、小学校時代からほとんど代表に縁がなくて、一度も日本代表に選ばれたこともありませんでした。ただサッカーが好きで、サッカーに携わる職業を生涯していきたいという気持ちがあったので、サッカー選手になった時、僕がこの職業で一生食っていけると思えないし、同志社大学の時も僕と同学年に4人くらいJリーグに入った人がいましたが、その人たちよりも僕は力的にも下でした。入った瞬間から次の仕事をどうするかが大テーマであって、サッカー選手をやって、その後、どうするか。サッカー選手になったことは僕にとっては考える時間というか、サッカー選手が天職だと思えませんでした。その後どうしていくかが自分にとって大事なことだと日々考えながらサッカーをやっていました。サッカーをやっていて、自分に向いている仕事は何か。僕はしゃべるのが好きで、おしゃべり好きのサッカー好きが、僕の学生時代からの人間性、スタイルだったと思います。その中でサッカーを伝える仕事をしていきたいと考えました。その裏には、Jリーグという新しいサッカーリーグがスタートして解説者がそんなにたくさんいなかった。人が足りないから仕事はあるだろう、と。現役1年目でクビになるのではないかという気持ちもあったのですが、運良か運悪か、その後、9年間、現役生活をして、31歳の時に

現役を引退しました。その時には周りにはすでに引退した人がたくさんおられて、ほとんどの方が元日本代表で、各テレビ局の専属解説で仕事をしていました。僕自身が仕事をするチャンスはほとんどなかったんです。ただサッカーを伝える仕事がしたいという気持ちはずっと持っていて、選手生活で2年目からサッカーをやめたらこの仕事をする決めていた部分もありました。サッカー解説をしていく上で、中継でサッカーを解説している場面はほとんどないと思います。地上波でサッカーの解説を90分間の試合でしたことは一度もありません。なぜかと言うと、メディアの中で、各局には専属解説がいて、TBSだと水沼さんと金田さん、テレビ朝日ではセルジオ越後さんと松木さん、福田さん、フジテレビだと風間さん、日本テレビだと北沢さん、竹田さんとか、その方々が局で中継する試合に関しては解説すると決まっています。僕が解説するチャンスはスカパーだったり、WOWWOWだったり、地上波ではない、専属解説を持ってない媒体で解説を少しはしていました。

この仕事を始める前に、どうしたら中西哲生という人間にオファーが来るだろうと思った時、今までと全く違うことをしないと僕に仕事はこない、と。今の解説者の、僕以前の解説者を否定しているわけではない、批判しているわけではないですが、常々僕自身が感じていたのはこれまでのスポーツ解説は解説ではなかったんです。テレビを見ていて、「ここでこういうことを言えればいいな」と思うことを言ってくれる人が、たまにたまになかった。だから僕はこの仕事をやろう、と。「俺だったらここはこう話す。こういうふうに説明したい」という場面がたくさんあって、それでこの仕事を選んだんです。僕が今まで聞いたスポーツ解説はスポーツ解説ではなく、スポーツ感想だった。サッカーで、すばらしいシュートが決まった瞬間に「今のシュートすばらしかったですね」と言うと、その場面は完結してしまう。誰が見ても「すばらしいものはすばらしい」と分かってしまうのがスポーツであって、「ここがすごかったんです」と言うことも必要ですが、一言で解決してしまう場面がほとんどなんです。そこで僕がどういうことをコンセプトに解説しようと思ったか。

3つあります。一つ目は、なぜすごいのか。「今のシュート、中村俊輔のフリーキック、すごかつ

たですね、こうこう、こうだからすごかったんですよ。中村俊輔はキーパーが立っている位置を見て、キーパーの右足に体重をかかっていたので、あえて左足で逆に蹴ったんです」と説明しよう、と。二つ目は、なぜだめだったか。「今のよくなかったですね」といって解説が終わっても問題ないんですが、「こうこうこうだからよくなかったです」と付け加えるようにしました。最後は、なぜだめだったかを説明した後に必ず「どうしたらよくなるか」、これを説明できなければ「なぜよくなかったか」と言う権利はないと思います。この3つを軸に解説をしていこう、と。中西哲生の解説を聞いた瞬間に「ああなるほどね」ということをいくつか出せるかを考えて、この仕事を始めました。

その前提にもう一つ、どうしても必要なものがあつたんです。二宮清純さんとか玉木さんとか、スポーツジャーナリストという肩書を持っている人はたくさんいますが、僕は選手を経験して選手を上げたスポーツジャーナリストなので、選手の気持ちを一番分かっているスポーツジャーナリストでありたいと思いました。「常に選手にとって前向きであるメッセージを発していくスポーツジャーナリストでいこう」と、この仕事を始める前に決めました。たとえば中西哲生が「ニュース23」で日本代表の試合を見て、ある選手が大きなミスをして、その試合に負けたとします。「このミスはこうこうこういう理由で彼が悪いです」と言って、その後、彼のプレーを見てみたいと思う人は、おそらくそんなにたくさんはいないと思います。そこで僕は、「ここでこうこう、こういうミスをした彼ですから、こういう経験は絶対、今後、役に立つと思いますし、この後、彼はこの経験を糧にすばらしいプレーをしてくれると思いますよ」と前向きのメッセージを発するようにしています。後は、基本的にはその選手のすばらしさを伝えることを大前提にしています。なぜかと言うと、この間のアンゴラ戦の後に、松井大介選手のVTRを解説する時流したんですが、彼のすばらしさを語ることによって、彼をもっと見てもらいたい。「松井選手のこういうところがすばらしい。ドリブルもすばらしい。相手からボールを奪う技術もある。強さもある」と説明して、「この選手をもっと見たいな」、その解説を聞いて「じゃ、スタジアムに足を運んでみよう、サッカーを見に行き

たい」という気持ちになってもらえると思います。

僕はサッカーという大きな船に乗っている船員なんです。その船がちゃんとうまく出発地から到着地にたどりつけるように、出発地は日本サッカーの最初の頃だと思いますが、終着地はワールドカップ優勝だと思います。そこにたどりつくためにサッカーを見る人を一人でも増やしたい。サッカーというスポーツのすばらしさを伝えたい。選手のすばらしさを伝えたい。僕は基本的には前向きのメッセージを伝えていきますが、批判的なことを言わないといけないう局面でも、なるべく見ている人が前向きの気持ちを持てる、選手が批判を受けたとしても、そういう言い方であれば受け入れられるような伝え方をしたい。それがこの仕事をやっている僕のベースになっている部分です。

メディアと現場。メディアの中で、サッカーはキラコンテツで爆発的な視聴率をとるスポーツですが、それは日本代表の試合に限ってのことです。Jリーグのゲームが、なぜ地上波のゴールデンタイムで放送されないか。それは視聴率がとれる可能性が低いからです。もうちょっとJリーグの試合がゴールデンタイムで放送されるようになるにはどうすればいいかを考えていますが、選手というのは唯一無二の財産であり、その選手に価値観を見出さなければ観客は試合を見に来てくれません。グッズも売れない。球団経営も難しくなる。高本さんが言われたように選手を広告してくれるのはメディアで、メディアとうまく融合していかない限り、Jリーグの成功はないと思っています。

Jリーグの各球団は、選手を露出させることに対して前向きではありません。が、選手を守るという立場でへんな露出のされ方をするのは怖いから、エンターテインメント性の部分で、その選手をドラマチックに見せたいためにインタビューをとった中で、ある一つの言葉だけ抜き取って使ってしまうとか、そういう怖さを感じているので、選手を出すことについて危惧している部分が多い。それでどういうことが起こるか。僕ら、メディアの立場にいる人間にとっては選手のインタビューが一番視聴率にアピールする部分で、インタビューすることで番組づくりがしやすい。ニュースソースの中にも組み込んでいける。サッカーというものが露出する時間

常も増える。僕がJリーグの関係者に言うのは「選手をもっと露出させてほしい」ということです。そうなれば皆、選手の名前を覚える。ナビスコカップの決勝の前にジェフの牧選手とガンバの大黒選手を呼んでトークショーをやって僕が司会をやりました。そういうものがあればメディアも取材に来てくれる。選手が語った言葉がニュースになって流される。このトークショーから「今週、ナビスコカップ決勝があるのか。大黒選手と牧選手が出ているなら見に行きたいな」と。そこに情報がたくさんあったり、映像が加わったり、選手の言葉が載るとかによって興味が沸くわけです。メディアという一つのアナウンス機関を使って、Jリーグ、サッカーがアピールされて、見ている方に浸透していく形になれば、サッカーというスポーツが皆さんの身近なものになっていくと思います。球団も価値が上がり、選手の知名度が上がれば「サッカーを見に行きたい」という人も増えるし、グッズも売れると思います。

僕自身も選手を経験して、メディアに出ている人間として、細心の注意を払って生放送でコメントしているのですが、一つの失敗が僕の信頼感のすべてを崩すことになりかねませんし、一言話したことが選手を傷つけることだったり、選手にマイナス要素を発生するものだったら、その選手の価値を下げってしまう。それが難しい部分で、選手をメディアに出すためには選手に対しての教育も必要ですが、「こういう言葉は言ってはいけない、こういう言葉で話さないといけない」とか、そういう部分もあるのですが、選手をメディアにたくさん露出することが、これからサッカー、Jリーグが発展する唯一無二の方向だと思っています。僕はそれをJリーグ各チームにお願いして、よりたくさんの映像とインタビューを持つことによって、分かりやすくサッカーを伝えられればと思っています。

メディアの放映権料の話ですが、僕も苦労していて、基本的に僕が出ている番組、「ニュース23」、「サンデーモーニング」、「ズームインスーパー」、「ゲッツスポーツ」でも僕自身が出演しているテレビ番組のVTRは僕は自分でつくっているんです。毎回、早めにスタジオに行って、隣に編集する人がいて、この映像のこの部分を何秒間使いたいの、僕が話しやすいように自分で「この映像を出してほしい」と。松井選手のドリ

ブルがうまいところを出したいので、このドリブルを見たいんだけど、でもカメラは別の角度の方が分かりやすいなと思えば、別の角度の絵を探すんです。これらはたまたまTBSがアンゴラの中継権を持っていたから、できたことなんです。ワールドカップ最終予選は、全試合テレビ朝日だった。その映像を試合が終わった後、サマリーでダイジェストにして編集して各局に配信する。15分くらい。「ニュース23」でその場面をやらうとしても、その映像はないんです。試合の中で、選手が一番素晴らしいシーンを見せてあげたいと思っても、その映像は、その中継をやっている局にしかなくて、そこが全部放映権料を払っているから、他局に使用される部分はあるけど、制限されるわけです。基本的には僕は映像が一番力があると思っています。僕はたとえばワールドカップ最終予選であれば、テレビ朝日から配信される映像しかないの、それを見て、「この映像だったら解説できるな」と。まず映像ありきでVTRをつくるんです。

映像の権利は、今、高く、2002年のFIFAのワールドカップの映像を使おうとすると、数分で30万円という金額がかかってしまいます。先日も稲本選手のインタビューを「ニュース23」でやったんですが、稲本さんの2002年のゴールのシーンを見せるために30万円必要になって、ばかばかしい値段だと思いかもしれませんが、それが実情です。テレビ局もそれだけお金がかかる映像だったら使いたくないと思うこともあって、僕がこの選手のこの一番いい部分を見せてあげれば、この選手のすばらしさが伝わるの、というのを伝えられないことが、結構多くて、そのへんは何とか映像が使いやすくなるようにしてほしいな、と。報道に関して言えば24時間は使用していいので、ニュースに関してはお金はかからないんですが、ある一定期間たってしまった映像はお金を払わない限りは使えないというのが、今のテレビ界の現状です。テレビ朝日で「ゲッツスポーツ」という番組をやっているの、テレビ朝日に行けば全部使えるので、うれしい部分ではあるんですが、日本テレビが放映権を持っている時もあり、TBSが持っている時もあり、フジテレビが持っている時もあるんで、そのへんの映像の使い方の難しさもあります。

今、僕がやっている浅い部分での話はお話したんですが、後は僕がいつも胸に秘めてやって

いるこの仕事の大事にしている部分は、とにかく選手を最大限にリスペクトする、審判も最大限にリスペクトする。僕自身も解説の仕事をしています。僕がやっている仕事は1を2とする仕事であって、決して0から1を生み出す仕事はできないので、1というサッカーというスポーツを2にも3にも見せるようにするのが僕の仕事で、2にも3にもできるかどうかは、映像をいかに駆使するか、どういう言葉を使するか、いかに分かりやすく見せるか。言葉の部分での訓練もしたり、分かりやすいのは比喻表現なので、サッカーというスポーツを全く違うスポーツとか、日常生活にたとえたりすることを基本的に考えていて、そういう部分では僕の役目はサッカーというスポーツを翻訳する人だと思っています。なるべく分かりやすくサッカーを翻訳して、皆さんにこれからも中西さんの解説を聞いたら、「なるほどね」と思うことがあるというふうに思われるような解説を一つでも多くしていきたいと思っています。そういう解説をすることによって、皆さんのサッカーを見る目が肥えてくると思いますし、そうなることがサッカー選手を見る目が厳しくなることですし、それはひいてはサッカー選手のレベルがより上がっていくことにつながると思います。最終的にはそれが日本代表がワールドカップで優勝することにつながっていくと思います。僕自身、生きている間にワールドカップで優勝する姿を見たいと思っているので、一つでも多く分かりやすく、手を抜かず、常に200%の気持ちでサッカーを皆さんに今後もお伝えしていきたいと思っています。

<横山>ありがとうございました。Jリーグに入られた時からセカンドキャリアを考えていたということで、さすがだと思いました。当事者に対する尊敬感を持って仕事されているということが印象的でした。

(休憩)

(クロストーク)

<横山>後半はクロストークをさせていただきます。テーマにありますように、報道か、エンターテインメントか、インターネットが出てきまして放送なのか、通信なのか、これからの問題だと思います。グルメブームで多くのグルメ番組をやっていますが、番組でこんなおいしい

ものがある、と。しかし、そのレシピ、仕組みにはなかなかいかない。スポーツもこんなものがある。しかし仕組みの部分、選手がどうなっているか。選手の考え方、思想性、プレー、サッカーの歴史性を出したいが、それを出せば売れない。派手なメディア露出することによって、新しいメディアファンが出てきてスポーツ振興につながっていく。イギリスでは野球はあまり知られていない。知っていてもやらない。野球の原型であるクリケットをやる。それがイギリス文化そのものだと理解していたわけですが、その組織も放映権料を得るなど苦肉の策を取っている。そのあたりを切り口にして、川井先生から3人の方に質問をしていただければと思います。

<川井>ゼミで議論になったことですが、スポーツ報道の中立、公正性について、皆さんにお伺いしたいと思います。テレビメディアは放送法がありまして、政治的にも中立、不偏不党で行っていくと規定されている。なぜならば放送というのは限られた電波で認められているもので、そこに参入する上では偏った報道があってはならない。テレビ放送以外では多チャンネル化時代に入っていく。活字のメディアであれば中立の報道は法的には規制されるべきものではないと思いますが、実務レベルではどのようにお考えになっているかを伺いたいと思います。

<高本>平等性について。徳島ヴォルティスはJ2にいまして、基本的にキー局が扱ってくれるコンテンツではないわけです。CXとか日テレとかTBSとかキー局が扱ってくれるとか、大阪の関テレとかMBSとか扱ってくれるものではありません。地域でやっているところは徳島のNHK、JRT、四国放送です。ですから平等ではないんです。そこが流すことによってホーム・アンド・アウェイ、ホームについては完全ホーム寄りに放映してもらおうようにお願いしています。それは徳島の地域の皆さんに自分のチームだと思っていただくのは、小さい会社にとっては必要なことで、平等性という部分は、うちの会社では、ないですね。

<潮>ぶっちゃけて言うと、新聞社は公共性については、テレビほど意識することは、制作する側はしていないように、個人的な感想としてはあります。たとえば朝日新聞のライバル紙の読売新聞は、ジャイアンツの報道が多くなるのは当たり前のことですし、朝日新聞が高校野球主

催者として大きくやるのも当たり前の話で、乱暴な言い方をすれば、読者の方がどう受け止めて、どっちをとるかということもあるでしょうし、ただ、我々が考えるのは公共性云々より、読売新聞がジャイアンツの記事が多い、それは結構だけど、そこに公正性、正しく事実関係をきちんと報道しているのか、事実を曲げて報道していないかということです。高校野球では朝日新聞が運営に携わっているので、その部分で問題はないのか、問題があった場合にきちんと報じることについては、すごく意識しています。

<中西>僕はあまり考えたことないですけどね。ほんとに考えたことないですよ。そういうふうに言われているのは知ってますけど、中西哲生の意見をちゃんと言うことが大事だ、と。正しくものを伝えるのは当たり前なこと、選手が言ってないことを言ったり、選手がこう言っていましたと本人が言ってないことを言うことはありえないし。選手を尊重して伝えていくことが大事だと思っているので。ただそういう中で曖昧に物事をしないことは自分のルールとしてあります。ワールドカップ予選は水曜日です。水曜日は「ニュース23」があって、その前に「報道ステーション」で福田さんがやっておられる。「報道ステーション」では比較的選手を呼んで試合の振り返りをする人が多いんですが、「ニュース23」で僕がやる時は、その試合の結論を出さないといけないと思っていますので、「今日の試合はよかったのか悪かったのかはっきりしてくれ」と言うんですよ、見てる人に。「よかったのはなぜか、悪かったのは何か。こういう結論です」ということは必ず言うようにしています。サッカーの報道って、基本的にそうですよね、潮さん、新聞も。

<潮>そうですね。中西さんが見た試合、私なら私が見た試合を書く。朝日新聞に何人も記者がいて、代表の試合を取材に行くわけで、それぞれのフィルターを通った結果が出てくる。最低限のことをきちんと守っていれば、自分の意見を主張するのは許容範囲で許されることだと思います。

<中西>逆にそうじゃないと、おかしくなると思いますがよ。

<川井>イギリスでは新聞など特にコメンテーターが「このファンだ」とありありと書いている。読み手としては違って見えてくる。日本の場

合、もっと偏りがあってもいいのではないかと考えていますので、偏りを出していくことについて、どうお考えなのかを伺いたいと思います。

<中西>偏りというか、僕の場合は、中西哲生の意見を聞きたいかどうか、それが言えるかどうか。「こうこうだから今日の試合はだめだった」と納得したい人や、「今日の試合はどうなったかな」と聞きたい人は僕の出る番組にチャンネルを合わせてくれる。新聞だったら買う。テレビだったらチャンネルを合わせる。それが如実に視聴率にも出てくると思うので、自分自身の切り口は変えない。偏りも一つの切り口だと思いますが、僕は僕なりの切り口があるので、切り口は変えないということですね。前向きで、選手を尊重して、しかも結論を出して、どういう理由かを説明するのが僕の切り口で、そこは変えてないです。

<横山>公共性というのは公益性、事実をどう伝えるかという、事実性、それが報道の原則だということですが、メディアという映像に目が行きますが、活字は検証が可能だということで、それは大事な部分だと思うわけです。いくらネットが発達したり、テレビで流していても、それを検証する機関がない。活字メディアが、それをどう補完していくか。読者の立場であれば、それも求められる。潮さんをターゲットに持っていきたいということもありまして、活字と映像メディア、ネットの登場について、お考えを議論していただきたいと思います。

<中西>僕は最初、テレビの仕事がなかったので、書く仕事しかなくて、僕、スポーツライターだったんです。現役の時も「ナンバー」に400字詰め原稿を30枚くらい書いていました。他の選手と違いを出すためにも、原稿が書けることをやりたい、と。原稿が書けたからこそ、テレビで分かりやすく話せることがあると思います。潮さんも文章を構築していく段階で、自分の結論を決めて書いていくと思いますが、僕は原稿を書いていた時はそうしていましたが、テレビの時は逆で、先に結論を言って、日本が3対0で負けたとしても、僕は必ず「よかった」と言うんです。そう言わないとテレビを見ている時はチャンネルを変えちゃうし、「サンデーモーニング」でそう言うと、大沢さんとか張本さんに突っ込まれるわけですよ。最初に「3対0で負けて、

よかったです。」「なんでよかったの?」と言うじゃないですか。そこから僕の意見が始まるわけで、負けた方が「次の試合に向けて」となる。「負けてよかった」という展開になっていけばいい、と。文章を書いていたからテレビの世界で話していく時、文章がマラソンであれば、テレビは100メートル走みたいなので、考え方を換えられたのは書くという動作があって、書く時に文章を構築して行って、結果を導き出すために、どういう要因や原因があるかを考えた上で文章を書いていたので、それがないと話せないと思います。

<横山>書くという行為が自分のメディアでのベースになっている、と?

<中西>ベースというか、完全に軸だし。今のテレビの番組に台本はない。「ニュース23」も「ゲットスポーツ」も「サンデーモーニング」も「ズームインスポーツ」も台本はなくて、全部台本は白紙なんです。僕が決めて、話す。僕と筑紫さんが話している時、筑紫さんが質問したことと、僕が話したいことが違ったら、話がかみ合わない。聞いたことに対して答える、答えたことに対して筑紫さんが聞くということでないで会話のキャッチボールにならない。そうでないとテレビを見ている時は予定調和になるわけです。それではチャンネルも変えられてしまう。「サンデーモーニング」で関口さんが僕に振る時はいつも唐突で、僕もいつ来るわからないからびくびくしているわけです。政治のネタでも振ってくるし。瞬時に答えられるかどうかは、自分で「こういう意見だ」と持っていくよりも、引き出しをたくさん持っていて、その瞬間に、どう文章を構築するかなんです。頭の中で。情報をもって、瞬時に「この言葉とこの言葉を」と組み合わせる自分で答えるようにしておかないと言葉に詰まっちゃう。それができているのは文章を書いていたからで、頭の中の構造としては瞬時にやっていますけど、文章を構築するのと、それは変わらないです。それがスローなのか、瞬間なのかの違いで、ただそれだけです。

<横山>テレビは短時間でどれだけ言葉を端的に答えるか。それを人間はすぐ判断できませんので、いろいろ考えて構築して文章の中で自分のキーワードを形成して伝えていっている。潮さんがおっしゃったように、致し方のない事情で紙面スペースには制限がある。それもよく似

た作業だと思います。贅肉を削ぎ落として中身をどう伝えるか。削ぎ落とせない部分はありますよね、スポーツ文化を伝えていく場合に。エンターテインメント性が高いのはメディアパリュウがある。それで扱いがよくなっていく。これは難しい問題ですが、エンターテインメント性の低い、マイナー的な競技は切り捨てざるをえないという話でしたが、そのへんについてのお考えはどうでしょうか。

<潮>難しいですね。たまたま私がサッカーをメインに担当してきているので、サッカーだけでなくシドニーオリンピックの時、体操競技をやったり、テニスを担当したり。体操競技はオリンピックの時だけ注目されるようなものですから、その時はパーッと派手に記事を書いても載ります。普段はなかなか載らないんです。当日載らないから、後日、書き換えて載せる努力をしたりとかするんですけど。しかしインターネットには当然叶わないわけで。ロンドン駐在の時の話ですが、チャンピオンズリーグ、サッカーのヨーロッパでのナンバー1を決める大会があります。それが一晩に8試合やっています。どこに行くか。行けるところは1箇所ですから、時差があって試合を見終わって東京に電話して夕刊の記事を書く。夕刊の記事を扱うデスクがいて、その人は日本でテレビで3試合も4試合も見ている。おかしな逆転した関係で、中にいてテレビを見て書いた方がいいじゃなかという意見もあるんですが、それは現場に行っている人間だから分かることを意識して書きます。監督の表情だったり、試合の後の選手の表情とかを工夫したり。

オリンピックの時はワールドカップもそうですが、一面にどんどん記事が載るわけです。その時に何を書くか。翌朝、新聞を開く時は皆さん、結果は知っているわけです。稲本のこんなシュートがあったというのは中西さんの解説を聞いて、皆、分かっている。それと違うものをどうやって書くか。「稲本がこのピッチに立つまでにどういう苦勞をしてきたか」、「ロナウドのあのシュートのテクニックはこういう背景がある」とか。テレビでは扱えないところを取り上げる努力は、普段、相当意識してやっています。

<横山>署名記事と無署名の記事の区分はどこで線引きをされているんでしょうか?

<潮>これはすごく難しいんですが、一応、ある



一定の基準はあるんです。面によって、政治面、経済面、スポーツ面によって大分変わっています。スポーツ面のスポーツ記事は主観がある程度入ってくるので、以前から署名を入れようという傾向がありました。最近では他の面でも、ニュースの独自タネの記事には名前を入れようという方向にはなっています。

<横山> 高本さんの話の中で、社会性への関与の報道がほしい、と。しかし、それもスポーツ面なんですね。考えてみたら社会面の扱いでされてもいいなと思う時がありまして、スポーツがそこに載ってこないのは、ちょっと区分して見ているのかな、と。担当者も守備範囲の違いだったらいいんですが、社会部の記者がエンターテインメントの取材に来た時も、ちょっと違うんですね、スポーツのエンターテインメント性と、彼らが求めているエンターテインメント性は。社会学や政治学のジャンルの対象になってしまって、スポーツそのもの、スポーツ文化そのものに対して社会性は認知されていないなという印象を受けるんですが、そのへんはいかがでしょう？

<潮> たとえば分かりやすい例で言うと、オリンピックは関心があって、よく読まれています。柔ちゃんが金メダルを連続して取りました。朝日新聞では1面に写真が載る。この10年くらいの経験では、そこに何月何日こういう試合があって、柔ちゃんが金メダルを連覇して取りましたというだけじゃないんですね。そこに至るまでの経過だったり、結婚したことによって生活が変わって、競技者としてこういう幅が広がったとか、こってりした話が載るんですね。中を開いてスポーツ面にも角度を違った違うネタが載る。さらにオリンピックの場合、社会面に展開します。社会面にどういう記事を載せるか、困っているところもあって、ありがちなのは家族の表情とか、彼女の田舎のおじいちゃん、おばあちゃんがこういっていた、と。果たしてそれが社会面の記事として必要とされているものかどうかは、すごく我々も悩ましいところですね。

<横山> 高本さんは、活字メディアに対して、球団経営者としてどういう要望がありますか？

<高本> 社会面での扱いを増やしてもらおうことが、クラブにとってはうれしいことなんですね。テレビでスポーツネタとなって、地域の中で育っていくとなっていく面では社会面になるわ

けです。アマチュアじゃなく、プロで会社として経営するわけですから、会社の売り物、給料を払わないといけないので、売り物は何かという時、それを売ればいいことなんですが、サッカー、スポーツは試合を見せるという売りものは一個ありますが、プラスの売り物がなかったら、試合で負けたら全部が金にならないわけです。生活ができない。会社が潰れてしまう。会社の企業価値のイメージをつくって地域でイメージアップすることが一番必要なと、私は企業を経営する中で思っています、そのことを考えると社会面での取り扱いによって、地域に根づいた信頼性が生まれてくると思っています。もっとスポーツ記者が増えるのではなく、社会部の記者が増えてという感じがいい感じかなと思いますね。

<潮> 記者の人数ではなく、どっちが多くても私はいいと思っています。部間の垣根がどんどんなくなってきているので、社会部の記者がスポーツを取材してスポーツ面に書くこともありますし、逆に我々がスポーツの現場で、徳島ヴォルティスの選手が試合が終わって疲れても、翌日、小学校に行っていて教えていると報じる価値はあると思っています。ただ、それをやったというだけではニュースになりにくくて、個人的には、それをやることで何が変わってくるか、徳島ヴォルティスが、その活動にどういう意味合いを求めているかを伝えられるような報道ができないかなとは考えています。

<横山> スポーツそのものが一般理解の中で、定義は別にしてエンターテインメントだと、だから社会性のジャンルには入ってこないという理解がある。一段下だという位置づけ、エンターテインメントが日本では一段低い位置づけで、アメリカのように商業ビジネス化しにくいことにつながると思うんですが、中西さん、いろんなところに行かれて、偏見とかどうでしょうか、スポーツについて。政治の関係者が中西さんと一緒にテレビに出られて、その方がスポーツを語りますよね。中西さんが出られた時、政治を振られるというのは、その方向は大賛成ですが、一般的には振られてませんよね。そこで終わると「はい、さよなら」という形が多くて。そのへんはいかがですか？

<中西> 「いかがですか？」と言われてもね。政治には基本的に関心があるので、振られたら話

します、専門的なことは話しませんが、僕らもサッカー界の人間がサッカー界でない人間から「こうでしょう」と言われたらカチンとくることもありますし。親分と張本さんが何を言おうとも「カツ」を言おうと「アップレ」を言おうとも、別にしょうがないな、と。その人たちが語ってくれることはうれしいなという気持ちには最近なってますけど。サッカーというスポーツを、全然違うジャンルの方が語ってくれることは僕らにとってはありがたいことだと気づき始めたので。それと同時に、相手にそれだけの余裕があればいいですが、僕が政治の話始めて「お前、何も知らないだろう」と政治家が思うと思うので、なるべく「36歳、一男子」の意見を「サンデーモーニング」では言うようにしています。ものはたとえなので、スポーツにたとえたり、サッカーにたとえたりすることによって、その物事を僕なりに僕の角度で切って話すようにしていますけどね。ただ一つ嫌だなと思っていることは「スポーツ選手は頭が悪い」と思われることが多いんですよ。ほんとにそうですよ。

<横山>「空疎な頭脳に逞しい肉体」という揶揄ですね。

<中西>一番嫌なのはバカだと思われることなんで、ほんとに。

<横山>私も聞きたいところは、そこなんです。バカにされてませんかという話です。

<中西>サッカー選手はそうではないと、覆したくて、こういう仕事をしているので。

<横山>よく分かっているんですが、そういうことはございませんかということです。

<中西>それが嫌で、だから「サンデーモーニング」に行っても、振られたとしてもへんなことを言いたくないし、へんなことを言わないためには、情報をたくさん手に入れて、新聞を読んだりして。知っていて、知らないふりをして話すのが大事だと思うんですよ。ほんとに知らなくて話したらだめなことを言っちゃおうと思うので。両サイドに岸井成格さんとか、田中秀征さんとか政治のスペシャリストがいる中で、僕が専門外のことを話しても仕様がなから、そういう中で「これくらいのことは言ってもいいだろうな」ということを言うようにして。後はなるべくサッカー選手、スポーツ選手は頭が悪いわけじゃなくて「頭がよくないとできないんだよ」ということを示せるようなことを言いたいなと

思っています。

<横山>ぜひとも今後も、声を大きくして、それを伝えていただいて。

<中西>それは言うてはだめなんで、言いませんけど。でも心の中に秘めたる思いはありますよ。だって普通は子どもの頃に最初から「政治家になりたい」と思う人はいないと思いますし、最初は「スポーツ選手になりたい」と思う人が多いと思うんです。だったらスポーツ選手が、もっとリスペクトされてしかるべきだと思いますし、オリンピックで金メダルとった人は、一生、その人の生活を保障してあげてもいいと思うんですよ。

<横山>おっしゃることが、今日のテーマだと思うんです。ドラマ仕立てにしたり、低俗な娯楽化してオリンピック選手をタレント化に持っていく番組も多い。その中で彼らがどういう気持ちでいたり、意識を持っているか。つくっている側が悪いというんですが、スポーツ選手の社会性を、選手自身がどう持っていったらいいか。それが今の中西さんのお話だと思うんですね。

<中西>まあ、そうですね。政治家の方は都合のいい時だけスポーツ選手を利用するので、たとえば金メダルとった時だけ、小泉さん、握手しにいったりとか、官邸に呼んで話をしたり。あんなのめです。ああいうのが嫌で。だったらスポーツ選手を優遇するようにしないといけない。野球選手とかサッカー選手はまだいいですよ。オリンピックに出ている選手は本当にお金がなくて、僕はトトの分配金の委員もやっていますが、お金が行き渡ってないですよ。サッカー選手は、まだもらっている方でいいですが、オリンピックの選手はほんとにお金もらってないし、金メダルとった時だけワッと騒がれて、政治家が握手しにきて、自分のPRに使って、半年もしたら、その人のことは忘れられていて、生活の保障もされないのが一番嫌なんです。スポーツ選手とかスポーツに携わった人たちの社会的地位が低いのと、その生活が保障されないのが僕は嫌で、こういうことをしている部分もあります。荻原健司君が国会議員をやっていますが、彼にある程度託して、スポーツ省をつくらとか言ってくれているので。政治が日本国民の気持ちを高揚させられるか。多分、小泉さんがいい政策をやったって、感激して隣の人に抱きつくようなことはないじゃないですか。ワールドカッ

プで日本代表が点をとったら、知らない人でも隣の人に抱きつくわけじゃないですか。それだけスポーツというのは人々を高揚させるものがあると思うんですよ。高橋尚子選手がマラソンで金メダルとった時も皆、すごい気持ちが上がるし、テンションも上がる。そういうことをしている人間に対して、日本の国の制度自体がよくないと思っているので。

<横山> 競技の夢を見て、それが生活の糧につながるのが理想だと思うんですね。しかしエンターテインメントは一方ではポイントですよ。世の中、市場原理で動いていますので、経済性、財源が重要になってきます。Jリーグが頑張ってくれてトトを売って上げてオリンピック選手たちの強化費に回っていくとか。

<中西> 全然、トト売れてないですからね。

<横山> となると、公共性とか報道できれいごとでセオリー遊びで終わりがちなのは、そこが回り回って、サッカーは蹴鞠だから文化保存だとか、国の助成でやらないといけないとか、メディア露出を發揮させてエンターテインメントで売って行って、それが財源につながって解決できるのだ、と。しかしそこが悩ましい関係だと思えますが、そのへんについて高本さん、球団経営を黒字経営にすれば解決できますよね。しかしいくらいいことを言っても予算がつかなければ動けない、と。

<高本> そうなんですよ。

<横山> そことの絡みで、エンターテインメントをどのようにとらえたいか？

<高本> 難しいですよ。私の考えは、お二人とちょっと違う部分があって、私の場合はエンターテインメントの部分で売り出す部分がありますから、エンターテインメントはあるべきことであって、エンターテインメントの中のコンテンツをもっともっと上げていかないといけない。それは当たり前のことであって、今、中西君の話のように、それ以外のスポーツの人は食えない人がいっぱいいるわけじゃないですか。Jリーグでもギリギリでやっている、うちみたいなチームがある中で、エンターテインメントばかり追いかけてもメシの種にならない。違う部分で、どうやってお金を集めてくるか。どうやってエンターテインメントの波にも乗っかるかを考えていかなければいけない。

<横山> 予算配分されますよね、クラブとして。

選手をとることにかかるお金と、地域貢献にかかるお金の分配のバランスで、多分、ご苦労されているところではと思いますが。

<高本> そうですね。人に対する部分は分配ではなくて投資ですよ。投資の部分で、三浦カズさんをつれてきた場合、観客が増えて実入りがあって、他のネットやグッズでどれだけ売れるから「これくらいの金額はOKだよ」と言う、人は投資で買いますから、分配の中に入れてないんですよ。

<横山> 単年度予算で、投資の部分と地域密着しないといけないお金、その配分はどうなっているのかということですね。

<高本> ああ、難しいですよ。

<横山> 突き詰めれば、きれいごとではいかないですね。そこにお金をかけられるかということで経営がありますから。

<高本> 全くその通りなんです。今年は社会的な部分で、一つはメディアを巻き込む予算を立てよう、と。タイアップした中での社会的効果をねらいたい、と。来年から別途の予算を立てるような形で5年計画をつくっているところです。社会的な部分に投資をしていきたいというのが私の考えです。

<潮> 私、トトもあまり買ってないですし、クラブの経営にも携わってないのですが、お金の換算できないものがスポーツにいっぱいあるわけで、政治家が出てきて、選手と目立った時だけ握手したりしますけど、2002年のワールドカップは日本と韓国が共催になりましたが、政治家をからめているんな動きがあった末、朝日新聞も何度か「日韓で共催にしてはどうか」と社説で書きました。個人的には、あの記事にいろんな思いがありますが、結果的に成功し、我々が思っている以上に交流が深まったり、日本と韓国の距離がすごく近くなったわけですね。現在、靖国問題とかあって、日韓関係はうまくいっていない。それから考えると、小泉さんができないようなことをサッカーというスポーツはできたんですね。そういう付加価値、お金で計れないスポーツの価値をメディアの側も人間もサッカーをやっているクラブも、それを伝えていく努力をできないかなと思います。

<横山> その思いを裏付けるものとして、このシンポジウムを位置づけています。エンターテインメントもそうですが、視聴率を上げたい、読

者が希望していると言います。「ポピュリズムが」というのですが、果たしてそうなのか。誰が制作者で、その意図を持ってやっているのかということが問題になるわけです。じゃ、よく考えると、なぜそうならないのか。どういうところに問題があるかをお聞きしたい、と。そういう印象はお持ちになられませんか、中西さん。

<中西> 一番困る質問を僕に振るんですか(笑)。それは、上の人が変わらないと無理ですよ、あらゆる意味で。僕らの世代の人間は実際に、高本さんは僕より二つ上なのに球団社長をやっているわけで、高本さんのような方が社長になるということは、始めありえないと思ったわけですよ。高本さんも、僕のような人間がテレビに出て、こんな話をしているというのもありえないと思うと思いますが、「変えたい」という思いがある人は変えられると思うんです。「変えたい」という思いがあっても、何かが動かないと変わらないので、「俺一人がやっても変わらないよ」というのではなく、「俺一人がやれば変わっていく」という人がたくさんいれば、変わっていくので、僕はそうしたいな、と。「変わらないからどうしよう」じゃない「変わらないけど、変えるよ」という気持ちが僕にはある。高本さんも、潮さんも、川井さんもあると思う。こういうところに来て僕が話をするのも、そういう思いを人に伝えたくて、そう思ってほしくて。僕の言っていることが全部正しいと思わないですよ。皆さんも、自分で聞いて、いいと思ったものを取り入れてもらえればいいと思うし、自分の意見として吸い上げてもらえばいいと思うけど、そういうことを地道にやっていくしかないですよ。僕、メディアの世界にいても、番組に出て、いろんなことを言いますが、そんなことより、一人ひとりに会って、サッカー教室やって、子どもと握手して、子どもと一緒に話をしてお父さん、お母さんと話をして写真を撮って楽しくサッカーやって帰れたら、その人たち、一生、僕のことを忘れないですよ、きっと。テレビで言うことより、一人ひとりが思いを伝えていくことが実は手っとり早くて、京都まで来て皆さんと話をし、ここにいる人たちは少なからず影響を受けてくれるだろうし、そういう思いでテレビを見てくれるのだから、スポーツを見てくれるだろうし、そういう人たちを増やしたいんです。一枚、一枚引っ繰り返していかないと、何十万人と

テレビでひっくり返せると思っていても、そんなのありえないです。僕はそう思っていて、そういうふうにしていききたいと思います。

<横山> 川井先生がおっしゃる公共の利益、福祉、憲法の基本的人権であること、それらとエンターテインメントは営業活動だということの整合性が、今の議論だと思います。その中でリテラシーが一つのキーワードですね。今はそこが問題だと思いますね。上の人とか、一人ひとりの努力で、ということはその通りだと思います。そこでメディア・リテラシーをどういう形で進めていくことが望ましいか、川井先生はどうお考えでしょうか？

<川井> 先程の議論を受けて、誰もがスポーツが発展することを望んでいるが、なかなか行政や国が動かない。学問分野として言われているのはどうにかしてスポーツの価値を数値化できないか、と。高本さんから経済波及効果が15億円だと、すごい金額が出ています。しかし金額に換算できない部分もあります。国民、住民、地方自治体、国、我々が共通の認識として「これだけの効果が上がる」と目に見える状態にして提案していくことは一つの方法だと思いますが、一方で、特に日本人という括りがいいかどうかはわかりませんが、少なくとも今の日本は、あまりにも短期的にもの考えすぎる。数値化して、いくらというメリットが計れなければ、手を出さないという価値観自体がマイナス要因の最たるところかなと考えます。教育もそうですが、50年後、100年後にどういう形でメリットが出てくるか、中長期的な視点を、今、まさに日本は持つべきだろう、と。教育についてもスポーツにおいても、その通りだと思います。

リテラシーについては、どういう視点をもった上で報道を見ていくか、聴いていくかが重要だと思います。我々はメディアを限られた電波の中で見ていますし、新聞媒体にしても限られた中で読んでいます。これからはインターネットの発展によって、もちろんネガティブな部分も出てくるとは思いますが、誰もがブログで情報を発信することができる。これまでの決まりきったものとは違う意味での風を吹かせることができるかな、と。そういう意味ではそれを意図しているかどうかは別にして、メディア・リテラシーは少なくとも今後はましになっていくかなと若干思っていますが、そのへんは潮さん、どの

ようにお考えなのか、伺いたいと思います。

<潮> うーん、難しいですね。すごく難しい問い掛けなんですけど。

<横山> 今後の可能性について。スポーツは情の部分、数値化できないものに価値があるということですが、川井先生がご紹介されたように、企業もCSRが求められまして、潮さんの話のように責任やアカウンタビリティを果たしてということがイギリスのスポーツ文化にはある、と。日本はそれが、まだない、と。今後、我々が考えないといけないのはビジネスとして捉えるということもマーケティングとして大事かと思いますが、それはそれで押さえながら、しかしすべてが網羅できないわけで、スポーツが社会的貢献にどう入っていくか。それを数値化していこうという動きも出てきて、SRIという考え方で社会的貢献している企業を数値化していき、そこにいろんな投資を集めていこうとなれば、スポーツ・フォー・オールで皆さんの力で何とかなっていきだろう、と。

もう一つ、これは個人的な考えですが、可能性は少ないし、議論もあるかと思いますが、スポーツは公共性が高いもので国の一人ひとりに関わる文化だとすれば、税制の中で、優遇できないか。いつも欠如モデルになって「そんなところではない、もっと社会的弱者がある」とか、議論が出された時、スポーツは「そら、そうだな」とまな板に乗ってこないのですが、じゃ、だめでも一応議論してみようというスタンスが、まだ日本にはないのではないかなと思います。

そこで今日の議論のエンターテインメントです。人によっていろんな捉え方があると思いますが、スポーツが生活文化になっていない。娯楽は日本の中では生真面目な国民性も災いしているのではないかなと思いますが、そういう意味でもスポーツ文化ということが、今後のキーワードとして益々重要となるのではないかなと考えます。

<横山> では、最後、一人1分間でまとめていただきたいと思います。中西さんから。

<中西> 楽しく3時間過ごさせていただきました。僕自身、いろんな人に会うのは趣味みたいなもので、新しい人に出会えば新しい人生を踏み出せるわけで、人の意見を聞けば、また新しい自分に変われるというのが僕の日々の楽しみであ

ります。変わっていけることが僕にとっては大事なことなので、日々自分自身に、ウィンドーズアップデートじゃないですが、自己更新していきけるような毎日でありたいと思っているので、日々進化したサッカー解説を心掛けていきたいと思います。今日の感想としては高本さんは、こんなに真面目だったんだ、と(笑)。僕が大学2年で高本さんが4年の頃は、人の上に立つようなことをするのが特に嫌いな人だったし、まさかこんな経営のことを一生懸命考えている人だと思わなかったで、しかも言っていることはすごい理に叶っていることを言っていて、徳島ヴォルティスは将来明るいと思っちゃいました。はい、ほんとそう思いました。楽しかったです。ありがとうございました。

<潮> もともとは私もサッカーをやっていて、いくつかのチームから卒業する時、誘われましたけど、当時まだプロリーグが見えてなくて、スポーツに長く携わりたいと思ってこの世界に入りました。その時からずっと感じていることを今日、改めて初心に帰るじゃないですけど、スポーツの選手だけでなく、スポーツの地位、意味を高めていきたいと思って、この仕事を始めたのを改めて思い出しまして、もう一回、シャンとしないといけないなと感じています。ありがとうございました。

<高本> ここに来られている若い方たち、またスポーツコメンテーターとか新聞記者とか球団の形で、いろんな形で携わりたいと思われている方が何人かおられると思いますが、その時も球団とメディアとの関係は同じような論議が繰り返されると思います。その時に自分たち一人ひとりが、新しいことを考えて、また論議していただけたらいいと思います。ぜひスポーツの世界に入ってきていただけたらと思います。どうもありがとうございました。

<川井> 代打として参上したわけですが、私にとっては大変活躍されている3人の方と一緒に並ばせていただき、うれしく思っています。スポーツをこれからどういうふう文化的に発展させていくかについて意見を述べさせていただきましたが、我々一人ひとりが中長期的に先を見てスポーツを心底愛することかできるかどうかにかかっているのかな、と。そういう気持ちを持っている方々が、こうして活躍していかれる。中西さんが「このプレーはここが頭がいいんだ」

と一言発していただくだけで、「あ、サッカー選手は頭がいいんだ」と。それを我々が受けていくことが好循環を生みますし、我々もそういう見方をする意味でのメディア・リテラシーができていくと思います。我々がやっていることは決して無駄なことではないと思います。またエンターテインメントの意味では、ここにこれだけのたくさんの方が集まっていたわけですが、この3人の方がいなくても、このテーマでこれくらいの方が集まっていたら、我々も研究者として頑張っていく必要があると思います。そういう学生をゼミ生として、これが

ら育てていきたいと思っています。ありがとうございました。

<横山>ありがとうございました。結論としては、スポーツ人は頭が悪くはないんだということが今日の確認だと思います。そういう認識を持っていただくことで、メディアに期待したいのは「市民の関心を掘り起こしていただきたい」ということです。これを最後のまとめにさせていただきます。それでは皆さん、長時間、どうもありがとうございました。先生方、どうもありがとうございました。これで閉会といたします。